

「若者たち」を読んで

ヤンキー系、いじめ被害、元・援交少女、被虐待、リストカッター、性犯罪被害、等々の経験ある生徒が通うある都会の夜間定時制高校に、ジャーナリストが足繁く通い取材したノンフィクション：「若者たち ～夜間定時制高校から見えるニッポン～」を読み終えた。

著者は取材を始める時に、ある教師から「定時制はトレンドイですよ。いま、日本の若者たちに何が起きているのか、その最先端が見えますからね。」と云われたが、暴力と貧困と虐待の世代間連鎖、格差、ワーキングプア、闇社会、家庭崩壊等の時代の矛盾を真っ先に受け止めざるをえずに傷ついた生徒たちとの交流から「その言葉の正しさを気づかされた」という。

一生隠し続けたい悲惨な体験を告白する生徒に「死にたいと思ったことはなかった？」との問いに、「死ぬ？違うね。消えてなくなりたい。生まれてこなければよかった。そんな感じかな。」と云う。

リストカッターの生徒は「一度切り出すと止まらなくなったの。しばらく切り続けているうちに、だんだん切りたいという欲求は収まってくるの。でも今度は、手首を切ってしまったという罪悪感に押しつぶされそうになって、また切りたくなるの。繰り返しているうち、血を見るとホッとするようになった。ああ、生きているんだなって。でもその反面、まだ生きているだ…、そう思うと今度は悲しくなって、また切っちゃうの。」と云う。

著者は、数々の生徒達の心情告白を聞く中で、彼らに共通して「自己肯定感のなさ」を感じ、「自分の命なんてクソ食らえ、地球なんてなくなってしまう。そう思って生きてる若者たちが、日本には相当数いることも忘れてはならない。」と云う。

確かに自己肯定感とは人と係わり合う喜びの中でこそ育まれるものであるだけに、家庭にも学校にも居場所がなかった若者たちが、多様な生徒がいるのが当たり前で、しかも管理色が少ない夜間定時制高校とそこの教師、級友たちの中に学力云々ではなく心の居場所を求めて通ってくるよう。

著者は、経済効率から序列化、均質化を重視する今の小、中、全日制高校の教育現場では「大規模なネグレクト（育児放棄）」が行われていると分析し、ネグレクトされた生徒のセフティーネットである定時制高校生の事例から視えてくる今の日本の教育政策を、最後にかんりのページ数を割いて検証する書でもあった。